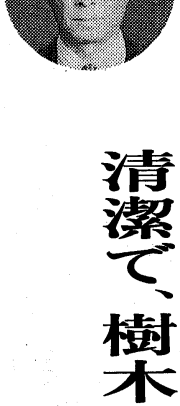
鶏卵産業の課題

清潔で、樹木・花のある農場に！

東洋システム㈱
代表取締役社長　安田　勝彦



農場は公園のたたずまい、鶏舎内部は、ウインドレス、開放を問わず清潔で効率的なオートメ化が進む…。

これが二十一世紀の養鶏場ではないでしょうか。

《設備選定》

オートメ化が進めば設備は装置産業化し、どんな安い機種を選んでも投資額は高額となり、一度導入すれば十五～二十年使用して初めて経営メリットが出る。弊社持論の「養鶏は鉄道事業」の傾向がますますはっきりしてくると考えます。四十～五十年前の車両が走って稼いでいるから、最新の特急列車を走らせて稼ぎに弾みをつけることができる…。

《鶏糞処理の多様化》

長期間使用するため、その間のランニングコストの差（養乾電気代、これに隠れたランニングコスト、すなわち、破卵、成績の出しやすさ、補修費など）は当初の設備コストに匹敵し、二十一世紀の採卵農場設備選定は、当初の設備費比較（一次元）と同時に、ランニングコスト比較を加え二次元で行なう必要があります。

家畜排せつ物法の施行により、鶏糞処理問題は、鶏卵生産コストの国際競争力強化の観点からも一層重要な問題になってきています。発酵処理は大切な方法ですが、都市ゴミ、産業廃棄物の発酵肥料分野への進出もあり、鶏糞処理の多様化に官・民で取り組む必要があると考えます。

鶏糞は配合成分の安定した飼料の未消化たん白が主成分であり、一週間以内をめどに水分二〇％前後に乾燥すればコストで）、石炭と同じレベルのカロリーがあり、次の用途が広がる可能性があります。

(1)都市ゴミ焼却炉の補助燃料

(2)都市ゴミ、産業廃棄物発酵処理の水分、あるいは発酵調整剤

(3)鶏糞発電。蒸気タービンに対する規制緩和との関係もありますが、百～二百万羽分の水分二〇％前後の鶏糞供給があれば発電の可能性があると言われています。弊社の大づかみな把握では、国内で、半径二～五キロ以圏で、百～二百万羽の採卵鶏が飼育されている地域は約二十か所あります。

焼却後の灰は土壌改良剤として活用できる可能性があります。

《弊社の役割》

トリとの接点であるケージシステムを中心に、飼料タンクからGPマシン入口までの鶏舎システムに機械・電気・コンピュータを軸に、技術を中心に取り組むことだと考えています。技術および生産の展開は、本年で十五年目を迎えるドイツ・サルメット社との提携・協力に加え、個別技術、生産では国内外の会社と積極的に提携していきたいと考えています。

イスラエルのアグロ・ロジック社との共同開発製品、弊社として初の世界市場向け製品となるイメージ分析型エッグカウンター（今春発売開始。弊社従来製品に比べ、性能は同一またはそれ以上で販売価格は約半分の予定）、あるいはAラインケージ部品の中国工場生産開始、鶏舎断熱サンドイッチパネル、断熱ドア、断熱シャッターの中国工場からの輸入開始（今春）はその一例です。

よりよい性能の機材をユーザーに納得いただけるアフタープライス価格で供給する、すなわちマックスバリューに向け、二十一世紀も努力を続けます。

（岐阜県各務原市金属団地九七―四）